中高生礼拝4月②

「はじまりを捧げる」

皆さん、こんにちは。

きょうは「はじまりを捧げる」という題目で説教をします。

はじめに、聖書のイエス様のみ言を拝読します。

**自分の義を、見られるために人の前で行わないように、注意しなさい。もし、そうしないと、天にいますあなたがたの父から報いを受けることがないであろう。**

**だから、施しをする時には、偽善者たちが人にほめられるため会堂や町の中でするように、自分の前でラッパを吹きならすな。よく言っておくが、彼らはその報いを受けてしまっている。あなたは施しをする場合、右の手のしていることを左の手に知らせるな。それは、あなたのする施しが隠れているためである。すると、隠れた事を見ておられるあなたの父は、報いてくださるであろう。**

**また祈る時には、偽善者たちのようにするな。彼らは人に見せようとして、会堂や大通りのつじに立って祈ることを好む。よく言っておくが、彼らはその報いを受けてしまっている。あなたは祈る時、自分のへやにはいり、戸を閉じて、隠れた所においでになるあなたの父に祈りなさい。すると、隠れた事を見ておられるあなたの父は、報いてくださるであろう。**

（『新約聖書』マタイによる福音書第6章1～6節）

信仰生活習慣の確認

突然ですが、皆さん、礼拝は好きですか？ 敬礼式は好きですか？ 訓読会は、どうですか？これらのものは、私たちが神様を中心とする信仰生活を行う上で、とても大切な習慣です。皆さんは、これらのものが自分の中でどれくらい大切なものとなっているでしょうか？ そもそも、なぜ礼拝に参加するのでしょうか？ 一緒に考えてみたいと思います。

ヤコブと神様との約束

　その内的意義を知るためには、神様と私たち人間との「約束の物語」に遡らなければなりません。旧約聖書に登場するヤコブという人が、私たちが伝統としている神様との約束をした人物でした。

ヤコブと言えば、双子の兄エサウがいて、彼から長子権を奪ったエピソードで有名です。父イサクに、自分がエサウだと思わせて、長子の特権を受け継ぐための祝福を受けましたよね。肌が滑らかだったヤコブは、自分がエサウであると父イサクに信じてもらうため、母リベカに言われるまま、毛深かったエサウのようになるように子やぎの皮を手と首に付けました。イサクはその時、歳で目がかすんで見えなくなっていました。それで、子やぎの皮をつけたヤコブに触ったイサクは、彼がエサウだと思って、長子の特権を受け継ぐ祝福をしたのです。

その後、そのことを知ったエサウは怒って、ヤコブを殺そうとします。

現代では、長子なのか次子なのかというのは、さほど大きな違いがある問題ではないように思えるかもしれません。しかし、当時のイスラエルの世界では、長子というのはその家の財産の相続権があり、家長として祭事を行う祭司としての地位がある、身分的に上の立場でした。エサウがヤコブを殺したいと思うほど、重要なことだったのです（注：相続の際に長子は他の兄弟に均分される物の2倍を受ける権利を持っていました〈申命記21・15～17〉）。

では、ヤコブは兄を出し抜くという「悪いこと」をしたのでしょうか？ 一般的な、少なくともその当時の常識から考えれば、「許されない悪事」だったことでしょう。しかし、サタンに支配される世界の中で、神様が人類を救うために、ヤコブを立てなければならないという神様の事情があったことを、神の啓示（創世記25章23節）を受けた母リベカがまず考えたというのです。ヤコブが私利私欲のためにエサウから長子権を奪ったのなら、それは「悪いこと」だったのかもしれません。しかしそうではなく、ヤコブは自分のためではなく、母リベカの「母子協助」を受けるなかで神様のみ旨に従ったのです。

さて、それでヤコブは、自分を殺そうとするエサウから逃れるため、ハランという遠い地に向かって、家を出て旅をすることになります。その時、ヤコブは「ベテル」というところで神様に出会います。その聖書の部分を読んでみましょう。

**さてヤコブはベエルシバを立って、ハランへ向かったが、一つの所に着いた時、日が暮れたので、そこに一夜を過ごし、その所の石を取ってまくらとし、そこに伏して寝た。時に彼は夢をみた。一つのはしごが地の上に立っていて、そのは天に達し、神の使たちがそれを上り下りしているのを見た。**

**そして主は彼のそばに立って言われた、「わたしはあなたの父アブラハムの神、イサクの神、主である。あなたが伏している地を、あなたと子孫とに与えよう。あなたの子孫は地のちりのように多くなって、西、東、北、南にひろがり、地の諸族はあなたと子孫とによって祝福をうけるであろう。わたしはあなたと共にいて、あなたがどこへ行くにもあなたを守り、あなたをこの地に連れ帰るであろう。わたしは決してあなたを捨てず、あなたに語った事を行うであろう」。**

**ヤコブは眠りからさめて言った、「まことに主がこの所におられるのに、わたしは知らなかった」。そして彼は恐れて言った、「これはなんという恐るべき所だろう。これは神の家である。これは天の門だ」。**

**ヤコブは朝はやく起きて、まくらとしていた石を取り、それを立てて柱とし、その頂に油を注いで、その所の名をベテルと名づけた。その町の名は初めはルズといった。ヤコブは誓いを立てて言った、「神がわたしと共にいまし、わたしの行くこの道でわたしを守り、食べるパンと着る着物をい、安らかに父の家に帰らせてくださるなら、主をわたしの神といたしましょう。またわたしが柱に立てたこの石を神の家といたしましょう。そしてあなたがくださるすべての物の十分の一を、わたしは必ずあなたにささげます」。**

（『旧約聖書』創世記第28章10～22節）

その時のヤコブの身の上と心情を想像してみてください。杖のほかに何も持つものがなく身体一つで家を出て、家族のもとにもう二度と帰ることができないかもしれない…。そんな孤独の絶頂だったのです。そのようなヤコブに、神様は「わたしはあなたと共にい（る）」「あなたがどこへ行くにもあなたを守（る）」「決してあなたを捨て（ない）」と伝えられたのです。

その神様の愛に触れて、ヤコブはどれほど心が慰められ、励まされたでしょうか。それで、神様に約束したのが、「すべての物の十分の一を、わたしは必ずあなたにささげます」だったのです。そして、その後の生涯において、ヤコブは常にそのようにして神様を大切にしました。

ヤコブは後に、神様の摂理を勝利し、イスラエル民族の祖先となります。そして、そのヤコブが神様と交わしたこの約束が、神様と人間との約束として受け継がれ、私たちが生活指針とする「伝統」となっていったのです。

十一条によって神様に守られる

それで皆さん、十分の一献金というものをしますよね？ 私たちが得る収入の十分の一を、必ずいつも神様に捧げるという信仰生活の基本です。これを、十分の一なので「十一条」と言います。それは自分のものが減るような感じがして、きっと嫌に感じる人もいるでしょう。

しかし、十一条献金をすることで、神様が皆さんの所有するものを全て主管することができるようになるのです。考えてみてください。この世界の万物は、そもそもは誰のものでしょうか？ 自分のものでしょうか？ 万物は、神様が我が子である私たち人間のために創造してくださったものです。本来は、人間が神の子として成長し完成することで、人間が万物の主管者になることができました。そうなれば、人間は神様と同じ愛で万物を愛してあげることができるようになっていました。

しかし、人間は自身の責任分担を全うすることができず、堕落して、神の子ではなくサタンの子となってしまいました。神様の愛で、万物を愛することができなくなったのです。それで、そんな私たちは万物の主管者の立場を得ることができなくなってしまいました。だから、万物は未だ本当の主人に出会うことができないでいます。

聖書の「ローマ人への手紙8章19節～22節」を読んでみましょう。

**被造物は、実に、切なる思いで神の子たちの出現を待ち望んでいる。なぜなら、被造物が虚無に服したのは、自分の意志によるのではなく、服従させたかたによるのであり、かつ、被造物自身にも、滅びのなわめから解放されて、神の子たちの栄光の自由に入る望みが残されているからである。実に、被造物全体が、今に至るまで、共にうめき共に産みの苦しみを続けていることを、わたしたちは知っている。**

『新約聖書』ローマ人への手紙第8章19～22節

つまり、私たちがお金や物を自分のもののようにして思っているのは、本当はそうあるべきではなく、神様が私たちに与えてくださっている「愛の現れ」である万物に感謝することが大切なのです。

だから、十一条は、「神様、私に万物を与えてくださってありがとうございます。これらは本来神様のものなので、全て神様が使ってくださいますようにお願いします」という思いで捧げたら良いんですね。それで神様が、「ありがとう。全て捧げてくれるあなたの心情が嬉しい。私は十分の一で十分だから、あとはあなたが生活のため、為に生きるために使いなさい」といって神様が私を祝福してくださるというのが、十一条なのです。

つまり、十一条を感謝で捧げるということは、十分の一だけではなく全てを神様が主管してくださり、神様が守ってくださるようになるということなのです。マラキ書3章10節には、十一条を捧げる人に対し神様はあふれる恵みを降り注ぐと記されています。皆さんも、ぜひ十一条の献金の習慣を大切にしていきましょう。

十一条は時間も捧げる

では、十一条はお金だけの話なのでしょうか？ 真のお父様のみ言を訓読してみたいと思います。

**これから皆さんは、もっているすべてのもの、時間までも十一条しなければならないのです。過去のように、何か物質だけではありません。もし、家族が十人いれば、家族の身代わりとなる一人を出さなければなりません。そういう基準で進まなければなりません。これから、私たち統一教会食口たちは、十一条ができなければいけません。十一条ができない人は統一教会の食口ではありません。これは、義務的です。天的な義務だということです。もし、そのような生活圏内を脱け出すようになる時には、いけないというのです。**

『牧会者の道』p.310

**皆さんの生活習慣は、このようにしていかなければなりません。一番最初のものは、神様の前にささげなければならないのです。純なるものは、神様の前にささげなければならないというのです。純なるものがない時には、神様が共にいてくださらないのです。新しいものがない時には、神様が共にいてくださらないというのです。皆さんは、それを知らなければなりません。祭物も、他の人の残したものをもってしてはいけません。それは、汚れに犯されてしまうことです。恩恵を受けた人ならば、一遍で分かってしまうのです。それで、不浄な所には、行かせないようにするのです。**

『牧会者の道』pp.308-309

このように、時間もまた、十一条として捧げていきなさいと、お父様はご指導されています。意識することは少ないかもしれませんが、時間もまた神様が創造してくださった万物ですから、時間を正しく使うことは、神様を大切にすることに繋がります。

最初の時間を捧げる

そして、神様に捧げるものは、「一番最初のもの」でなければならないと仰っています。時間において、「一番最初のもの」とは何でしょうか？ 一日の最初とは？ 一週間の最初とは？ また、一ヶ月の最初とは‥？

そうです。真の父母様が示してくださった一日の最初とは、訓読会です。一週間の最初とは、敬礼式、そして礼拝ですね。また、一ヶ月の最初にも、敬礼式があります。訓読会、敬礼式、礼拝は、それぞれ最初の時間を神様に捧げるという意義があるのです。

一番最初の時間を神様に捧げるということは、他のことではなく何よりも最初に神様のために過ごすということですから、何よりも神様を大切にしている、という心情姿勢に繋がります。

真の父母様が示してくださった敬礼式の基準の時間は、朝5時です。5時は早くて、眠くて辛いなと思うこともあるでしょう。しかし、その日の活動をする一番最初の時間を捧げるから、価値があるのです。そのように神様に最初の時間を使うことで、神様を一番に考える生活、神様を中心とする生活になるんですね。そうすると、神様はサタンに言うことができるのです。「この子は私の為に一番最初の時間を捧げたから、この一日、この一週間、この一ヶ月は私が守ってあげることができる！」と。

反対に、それらをしなかったら、サタンが神様に言えてしまうのです。「神様、この子は神の子と言いながら最初の時間をあなたのために使わず自分中心に過ごしています。この一日、この一週間、この一ヶ月は私がこの子に介入する条件があります」と。

そして、同じ訓読会、敬礼式、礼拝を捧げるのも、嫌々するのではなく、神様のために心を込めてすることで、神様は喜ばれ、天の条件となっていきます。冒頭で読んだ聖句のように、誰に言われたから、ではなく、誰も見ていないようなところでこそ、神様にはじまりを捧げることができるような心を育てていきましょう。

きょうは、「はじまりを捧げる」という題目で説教を致しました。以上で説教を終わります。ありがとうございました。